

福島

——街に即した暮らしを残す

江戸時代に宿場町として開かれた大内宿は、茅葺き屋根をはじめとし、当時の街並み、建物、景観を今の時代に、そのままとどめている。この町を残すため、昭和四十年代から住人たちの試行錯誤が繰り返された。行政での保存が決まり、県内屈指の観光地となったこの土地は今、建物だけでなく、古くからある暮らしを残す努力をはじめている。

取材・文 木内昇 写真 谷山 實



目の前に広がるその光景を見て
いるうち、自然と肩の力が抜けて、
「戻ってきた」という錯覚を抱いて
しまう。香ばしい囲炉裏の匂い、
村を走る水路、遠くまで続く山々、
そしてなにより茅葺きの家屋。福
島県西部に位置する下郷町・大
内宿は、日本の原風景ともいえる
景観を今にとどめている。間口四
間半、奥行き一間の寄棟造りの
家々が整然と並ぶ街並みは、江戸
初期に開かれた宿場町の名残であ
る。ここにはかつて奥州街道の裏
街道である南山通りが通っていた。
本陣、脇本陣が建ち、参勤交代の
折には会津藩主の行列が休息をと
っていた。江戸中期に大名行列の
脇街道通行禁止令が出たのちは、
荷を運ぶ人馬の往来が中心になっ
ていたが、明治十七年、会津三方

道路の一つとして開拓された新し
い日光街道の開通によりついにそ
の往来も絶えてしまう。半農半宿
で暮らしてきた大内宿は、人気の
少ない農村へとその姿を変え、こ
の山あいひっそりと取り残され
ることになる。

世は移り、戦後。高度経済成長
の波はこの静かな山里にもやって
きた。新しいものこそ第一とされ
ていた時代。住人たちは江戸時代
から変わらない村の風景を、特に
茅葺き屋根を脱皮したいと考える
ようになる。

「ここを残そう」ということは考え
てないですよ。当時は、古いもの
は汚いもの、という考えがありま
したから。それよりもいち早く今
風の家を作りたいかった」
というのは、現・下郷町大内宿



雨のそぼ降る大内宿は特に風情がある(右)。地元の人が「川」と呼ぶ清流の用水路は野菜や飲料を冷やしたりと、なくてはならない存在。ここで毎年正月に「若水汲み」が行われる(上)。



青年会会長にはじまり、各種長(おさ)を務め大内宿保存・発展に貢献した阿部公さん。現在は内宿行政財産区長と下郷町消防団長を務める(右)。茅葺き屋根のみやげもの屋や蕎麦屋などの店が軒を連ねる(下)。





かつての本陣は現在見学可能な「大内宿町並み展示館」となっており、当時の生活道具や調度品が展示されている（左）。檜風呂や雪隠なども当時の型を展示（左下）。参勤交代の折、会津藩主が休んだという「上段の間」（右下）。



かつて名主だったお宅。どの家もそうだが、太い柱と梁、造りもすべて堅牢だ。欄間や取っ手など細かい部分にも細工が（下）



行政財産区長を務める阿部公さん。時を同じくして大内ダム建設の補償金が村に下り、人々はそれを元手に屋根をトタンに置き替えはじめた。中央の道を舗装しようという計画も持ち上がった。ひとりの青年がふらりとこの村にやってきたのは、そのさなかの昭和四十二年のこと。武蔵野美術大学で建築を学びつつ、日本各地を巡って伝統建築を調査していた青年は、大内宿に足を踏み入れ目を疑った。ここまで完全な形で茅葺きを残している集落はない、と。以降彼は、何度となく村に通い、各家の図面を引き、建築物の希少価値を住人に訴え、ついには文化庁にまで保存申請を直訴するのである。それが大内宿保存に大きく貢献した、現・武蔵野美術大学教授・相沢詔男氏であった。

村の若者たちが 保存に向けて動き出す

だが村人たちからすれば、茅葺きも寄棟造りも黒光りする大黒柱も、生まれたときから当たり前に目にしてきたもの。それを突然やつてきたよ者、しかも学生同然の若者に「価値がある」と言われても実感はわくはずもない。が、村人たちの思いをよそに、相沢先生の活動はマスコミの目に留まり、大内宿は新聞を皮切りにTV、雑誌といったメディアにたて続けにとりあげられるようになる。中には、事実を曲げた報道もあった。

「この村は貧乏したから茅葺きが残ったということをTVが放送してしまったわけ。そんじ、こんだ村が怒っちまってよ。全国に恥さらしたのと同じだから」

相沢先生のまっすぐな熱意が、無責任な外野によってねじ曲げられ、住人たちの誤解や不和を生んでしまったのだ。老人たちを中心に、保存なんてするな、と声が上がる。文化財に指定される前に、と慌ててトタンを葺く家がなん軒も出る。そんな中で相沢先生を支持したのは、彼と同世代である阿部さんら村の青年たちだった。若

者ほど新しいものに飛びつくような気もするが、なぜ保存という方向に気持ちが動いたのか？

「正真、農業のいきつまりがあつたんだ。農業プラス かなければ将来がない、と若いもんは思ってたから」

会津は言わずと知れた豪雪地帯である。大内では稲、そば、インゲンなどの農作物を栽培しているが、生計を立てるには、畑仕事のできない長い冬の間、出稼ぎにでなければならぬ。また若松の会社や役場に勤めながら、農業を営む家も多い。街並み保存によって観光のめどが立てば、農業と合わせこの地域だけで生計を立てられる——当時、青年会会長をしていた阿部さんは再々会合を開き、保存に異を唱える人々と根気強く話し合った。住人を連れ、長野県木曽郡にある妻籠宿まで視察に行き、観光化のためのノウハウを聞くこともした。相沢先生とも密に相談し、保存の助成金を得るために自ら行政にも掛け合った。嫌なこと辛いことは山ほどあった。でもそれは大好きな酒で流して、次の日はまた一から挑戦した。「人は馬に乗ってみる、って言うでしょ。まず話さねば。会って目を合わせて



「結いの会」の吉村徳男さん。イワナを焼いている
囲炉裏では、ガスがひかれる以前、吉村さんが中
学生の頃まで食事の支度に使っていたという「右」
平置きを三回すると「代終る」と言われている
茅葺き。他の家の置き替えを手伝いつつ技術を覚
えていく（中、左、後白河法皇の第一皇子である
高倉宮を祀った高倉神社に続く鳥居（下））

話すといつのは大事なことだ。阿
部さんたちの努力が実を結び、大
内宿が重要伝統的建造物保存地区
として文化庁の指定をつけたのは、
相沢先生がこの集落を見出してか
ら実に十四年後の昭和五十六年で
あった。建物を「売らない、貸さ
ない、壊さない」という三原則の
住民憲章も作られ、ようやく村と
して保存へと動きはじめたのだ。

地域の結束を高めるため 「結いの会」を発足

生活の場が観光地になる中で問
題も生じる。家の中を物珍しげに
のぞきこまれる、留守中に無断で
家に入られる——気持ちよからう
はすがない。さらに観光客の落と
すゴミで地域が汚れ、川には冷蔵
庫や洗濯機といった粗大ゴミの不
法投棄までされる。この地に生ま
れ育った吉村徳男さんは、観光地
化により本来の暮らしや自然が失
われていくのを憂慮した。建物同
様、大内宿の暮らしも守らなけれ
ば、と住民有志で「結いの会」を
立ち上げた。「結い」というのは田
植えや屋根替えなど労力のかかる
仕事をお互いに人手を出し合う昔
から行われてきた助け合い。

「眠っていた行事を復活させ、自
分たちで茅屋根を葺こうという運
動もはじめました。茅手（茅葺き
職人）も高齢者しかいなくなっ
ていたし、技術を伝承する必要も感
じていたからね」

平日は役場勤めをしながら、休
みの日には住人分の茅を集め「や
ってください」と手渡した。それ
でも周りがなかなか積極的になら
ないのを見て、吉村さんは自ら茅

手に弟子入りするため二六年勤め
た役場を辞めた。昇進を控えてい
た矢先だった。

「背水の陣を敷かねば、本気にな
らねえもの。俺が背広着てネクタ
イしめて、村の若者に『お前ら屋
根葺きやんねえと』って言っても
説得力ないでしょう」

代々続いた茅葺きをよその職人
に頼むのではなく、自分たちの手
ですることが大切だ、と考えたの
だ。そうした作業風景も含めて残
すべき村の景観なのだ、と。吉村
さんは自分の学んだ技術を教え、
茅集めも各家でするよううながし
た。お陰で半分近くトタンがかか
っていた街並みが、もとに近い状
態にまで戻った。

「ほんとに大変だねえ。その頃、
渋谷で街並みゼミに参加したとき
思わず壇上で、『大内宿に火をつけ
て燃したいと思ってる』って言っ
てしまったくらい疲れ果てました」

そう言うて笑う。一方で口コミ
や報道により観光客は増え続けて
いた。民宿が数件と昔からある雑
貨屋があった程度の大内宿に、飲
食店やみやげもの屋ができればじ
ま。今はほとんどの家が商売をし
ており、訪れる人が年間約七〇万
人という立派な観光地となった。

当初の目的通り、この土地で生計
が立つようになったのだ。

が、そこで新たな問題が生まれ
た。住人たちが、保存よりも商売
を優先するようになっていったか
らだ。

「商売が忙しいから、と結いに来
なくなる住人も増えたんです」

吉村さんが言えば、阿部さんも
「目先の利益にとらわれて、保存
と観光の兼ね合いがうまくいかな
いんですよ。それではいつか飽き
られてしまつ。それより景観を残
すことが一〇年後、二〇年後まで
人を呼ぶんだが」

と嘆く。保存会が音頭をとり、
自動販売機、看板の規制など景観
を乱さないための規定を盛り込ん
だ保存の申し合わせを決めた。ふ
たりの店では中央で作った製品で
はなく地元で作ったものを中心に
扱うようになった。「でないと漢字
で土産って書けないでしょ。土地
のものを活かさない意味がない
から。そのために売り上げが落ち
ても仕方ない。地のものを売れば
地元の人には喜ぶ、観光客も土地の
ものがあると喜ぶ。そこに交流が
生まれる。だが効率化を図る流れ
の中で、彼らの意見は簡単に受け
容れられることはないという」。



大川沿いにある国定天然記念物にも指定された「塔のへつり」。長年の浸食と風化による岩肌が並立する景勝地だ。

家を守り、地域を愛おしみ 自分たちの文化を誇ること

「以前、祭りも観光客が来やすいように日曜日にしようという意見もあった。俺、それは絶対ダメだ。って言ったの。高倉神社の氏神様のための祭りなのに観光客に合わせるのはいけない。って。鯉のぼりは上げると買ひ物の邪魔になる。って声もあるけど、それがこの村本来の風景なんだから」

古来の年中行事の裏には科学がある、と吉村さんは言う。正月に新しい手桶で水路の水を汲んで飲む「若水汲み」は、「水路の水を飲むんだから、川は汚せない」という心につながる。十二月十二日に一二歳の子供が火の用心と書く一番火ふせの効果がある、と言われているのも、一番火遊びをする年頃の子に

「火には気をつけなければいけない」と自覚させる効果がある。大内宿では数百年大火事がなく、家々が残ったのも、こつした行事や信仰

のおかげでもある。それを通して人々がつながり合え、地域の一員としての自覚を持てるのが、年中行事が負う役割なのだ。

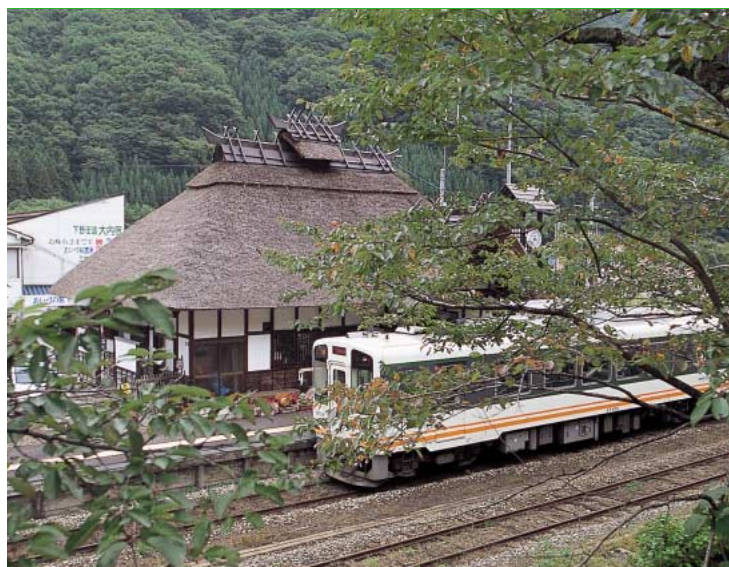
街並み保存と暮らし、観光との理想的な調和というものをこの限られた枚数で見つけることは不可能だ。これだけ努力してきた大内宿も、まだ答えを探している。古い建物は外から見れば「すてき」でも、実際そこに暮らす人にとっては不便極まりないこともあるだろう。また、常にその前の時代の景観を変えることを繰り返してきたのが歴史だと考えれば、景色が変わるのはむしろ自然の流れかもしれない。ただ言えるのは、先人たちが歩んできた道を知らずしてはたしてこれからの時代に本当に必要な「新しい」ものを選び取ることができようか、ということだ。残ってきたもの、続いてきたものには意味がある。学ぶべきことが山とある。結いの会が提唱する保存とは、この土地に根付いている風習を知り、その理由を解し、現代の生活に融合していくことだ。この建物にもっとも見合った暮らし方をしていくことなのだ。

吉村さんはこれからの社会に大事なものは、ITではなく「愛と手」

だ、と言い切る。

「ネットで相手の顔も見ないで書き込むような一方通行じゃなく、隣人愛、家族愛、自然愛などを大事にしたい。情報は一過性のものでしかないけど、自分の『手』を使っただけ覚えていくことは忘れない。そういう村作り、社会作りをしていかないと本当に無機質な世の中になるよ。今の俺らが学べるのは、昔の人たちは大した道具もないのに、これだけ立派な家を建ててしまった、ということ。それは地域のコミュニティがしっかりと、助け合っていたからだと思っ。俺ら、今こんな仕事、できないよ」

たぶん人が生きる上でもっとも大切なことは、いつの時代も変わらないのだ。会津の一本気な精神をもった男たちが身を粉にして動き、この宿場町を守った。彼らの一番大きな原動力となったのは、自分が生まれ育った土地に対する誇りと愛情だったのだろう。「この村を出ていくことは一度も考えたことがなかったな」という阿部さん、四〇〇年も続いてきた村で、先祖代々この家で冠婚葬祭を行ってきたんだ。俺が親父やおふくろを送り出したように、俺もここか



トロッコ列車が走る会津鉄道の湯野上温泉駅には日本で唯一の茅葺き屋根の駅舎が。駅舎内には囲炉裏もある。

ら送り出されたい。そうやって次の代もまた次の代も続いていって欲しい」と吉村さん。家を守りたいという思いが、土地を愛する気持ちとなって、地域が育つ。「嫌になつたら他に行けばいい」という一過性のかかわり方では生まれにくい、重厚で美しい景観が生まれる。「日本にはそれぞれの地域にいろいろな文化がある。それを土地の人々は誇りとして残すべきだと思います」

彼らは一所にいて懸命に土地を守っている。けれどその意志は、時代を超えて受け継がれ、永遠に旅をしてゆくのだ。